

小城下町武雄の変容

——絵図の検討を中心に——

大平 晃久 （人文社会科学域（教育学系）教員）

I はじめに

近世城下町の構造や景観復原に関する研究は、歴史地理学をはじめ多くの分野で取り組まれてきた。しかし、そのなかで城郭ではない陣屋は等閑視され、「そもそも本格的な研究の対象とはされないまま、城郭に付随して陣屋の事例も一部集められるという程度の扱いが長らく続いてきた」¹⁾といえる。

近世の陣屋は、さまざまな類型を含み、一様ではない。これまで中島²⁾や小高³⁾によって陣屋の分類案が示されてきた。それらをもとに、領主の町形成への関与を示す指標⁴⁾となる、領主居館をとまうか、それとも地方支配役所のみかという差異を重視し、修正を加えると次の4類型のようになろう。すなわち、大名・交代寄合格旗本居所（参勤交代を行う大名・交代寄合格旗本の居所で城郭とはよべないもの）、地方支配役所（幕府や藩・旗本領の地方支配の役所）、家臣居所（藩内（高禄）家臣の居所）、軍営（海防陣屋や蝦夷地陣屋など兵の駐屯地で軍事的側面が強いもの）に分類して、近世陣屋を考えることができる。

なお、陣屋を核として家臣団の屋敷地、町人町（商業的な機能を担う地区）が付属、あるいは隣接する町を、「陣屋町」とよぶことがある。しかし、本稿では城郭と陣屋は連続した存在であることを重視し、陣屋町ではなく（小）城下町とよぶ。

近年、陣屋については、木村・松原⁵⁾が、城郭と同等の存在として、遺構の形態や構造の詳細な建築史的調査の必要性を指摘している。歴史地理学からは、土平が大名居所に限らず種々の陣屋について、総合的な比較検討を行いながら景観復原を中心とした研究の必要性・可能性を論じている⁶⁾。また日本史においても、「陣屋の歴史的価値を確認」⁷⁾する「大阪陣屋サミット」というような動きもある。従来、歴史地理学では、ある程度の町人町の発達した大名・交代寄合格旗本居所陣屋が多く研究対象とされてきた。しかし、上記のような動向をみれば、近世城下町を考えるうえでそれ以外の陣屋を無視するわけにはいかないはずである。

本稿で取り上げる武雄（佐賀県武雄市）は、佐賀藩領にあって、武雄鍋島家の在方屋敷・役所（「御屋敷」）、すなわち上述の家臣居所陣屋が所在した小城下町である。武雄鍋島家は佐賀藩主鍋島家の「親類同格」の格式を有し、佐賀藩請役家老の地位にあり、「ゆうしゅ 邑主」として地方支配を許される「大配分」を得ていた。以下、武雄「御屋敷」を「武雄陣屋」とよぶ。武雄鍋島氏は、元来は中世以来この武雄を拠点とした後藤氏で、1577年に龍造寺隆信から養子を迎えて龍造寺氏に臣従し、のち龍造寺氏を名乗った。さらに鍋島直茂による権力継承にともない鍋島氏に臣従し、鍋島姓を名乗るに至った。

武雄陣屋は、後藤氏代々の居城で、いわゆる一国一城令で廃された塚崎城つかさきの麓に所在した。この塚崎城は御船山みふねやまの山頂ではなく険しい斜面に築かれた点で特徴的である。武雄鍋島氏の2万1600石の私領支配の拠点である陣屋（「御屋敷」）は、堀で囲まれた郭にあり、周囲には計画的に配された家

臣団の屋敷地が附属し、大名の陣屋をしのぐような規模であった。さらに、温泉がありのちには長崎街道宿駅（塚崎宿）をも兼ねた湯町を町人町としてともない、小城下町とよぶに十分な存在である。

武雄陣屋・小城下町を描く絵図は、武雄鍋島家資料（武雄市図書館・歴史資料館）として豊富に残っている。それらを用いて塚崎城の城郭はかなり言及されてきた⁸⁾。また幕末の武雄全体の復原図も提示されている⁹⁾。

一方で武家地、町人町の、近世を通した変遷はほとんど論じられていない。町人町については、町の構成がわかる史料が限定され、変遷がたどれないのに対し、武家地を描く絵図は豊富で、考察の余地がある。また、陣屋跡地は武雄高校になっているが、全く跡形もなく、解説板の1枚もない。武家地に関わる記念碑や解説板も皆無に近く、現地を訪れてもそこが小城下町であったことすら知りえない状況にある。

本稿は、家臣居所陣屋を中心とした小城下町の一事例として武雄を取り上げ、歴史地理学的な景観復原を主に志向する。以下、Ⅱでは、2枚の絵図を主に用いて、陣屋・武家地が近世の間にどう変化したか、そうした近世の景観が現在の景観のなかにどう読み取れるかを示し、武雄の家臣居所陣屋を核とした小城下町の特徴を考えたい。Ⅲでは陣屋跡に対象を絞り、まず、陣屋跡が大きく損なわれ、形跡を留めなくなるのは昭和末期から平成初めという近年のことであることを確認する。加えて、現地や出版メディアにおける陣屋の表象はごく限られていることをみる。

Ⅱ 近世における陣屋・武家地の変容

(1) 小城下町の構造 上述したように、武雄陣屋・小城下町を描く絵図は豊富である。そのうち、本稿では図1・図2の2枚の絵図を主に用いる。図1「武雄城下屋敷図」、図2「御屋敷並武雄社付近図」はともに武雄鍋島家資料に含まれ、記載内容からそれぞれ18世紀後期ごろ¹⁰⁾、1850～60年代¹¹⁾に成立したものと推定されている。ともに図の一部のみを、また元来は南が上になっているのを北が上になるように回転して示した。また、図3には長崎街道と図2をもとにした陣屋の外郭を示した。

図3をもとに武雄小城下町の全体についてみておきたい。図1・図2は武家地と陣屋①、陣屋背後の御船山が描かれるが、町人町は描かれていない。図3に示したように、町人町は長崎街道沿いに発達し、宿駅を兼ねていた。幕末時点でも、陣屋の大手口ともいうべき②と町人町の間には水田が広がっていた。こうした町人町と武家地の分離は、戦国的な城下町形態の残存であるとみることができる¹²⁾。この町人町と武家地の間は扇状地の末端で¹³⁾、やや低湿とはいえ、氾濫原である南の武家地よりは町の発達する条件は良かった。それにもかかわらず、町が発達していないことには留意が必要である。

長崎街道の宿場町の入り口には石垣と土塀を備えた構口が設けられることが多いが、武雄では構口の存在は知られていない。ただし、図3の**ア**、**イ**2か所に木戸が設けられていたという¹⁴⁾。

以下、図1・2を読み解き、従来指摘されていないことを中心に検討をおこなう。さらに、陣屋や武家地の痕跡が現在の景観の中にどう読み取れるかみていく。

(2) 「武雄城下屋敷図」 まずは18世紀後期ごろの成立と推定されている図1「武雄城下屋敷図」からみていく。

図中には塚崎城の曲輪群が描かれている。武雄御屋敷すなわち武雄陣屋は、その塚崎城の二ノ丸③・



図1 武雄城下屋敷図 (部分)

武雄鍋島家資料 武雄市蔵。図中の①～⑭・⑯・⑰・⑱・⑳は図2・3と共通，ウ～キは本図のみ。



図2 御屋敷並武雄社付近図 (部分)

武雄鍋島家資料 武雄市蔵。図中の①～⑳は図1・3と共通，ク・スは本図のみ。

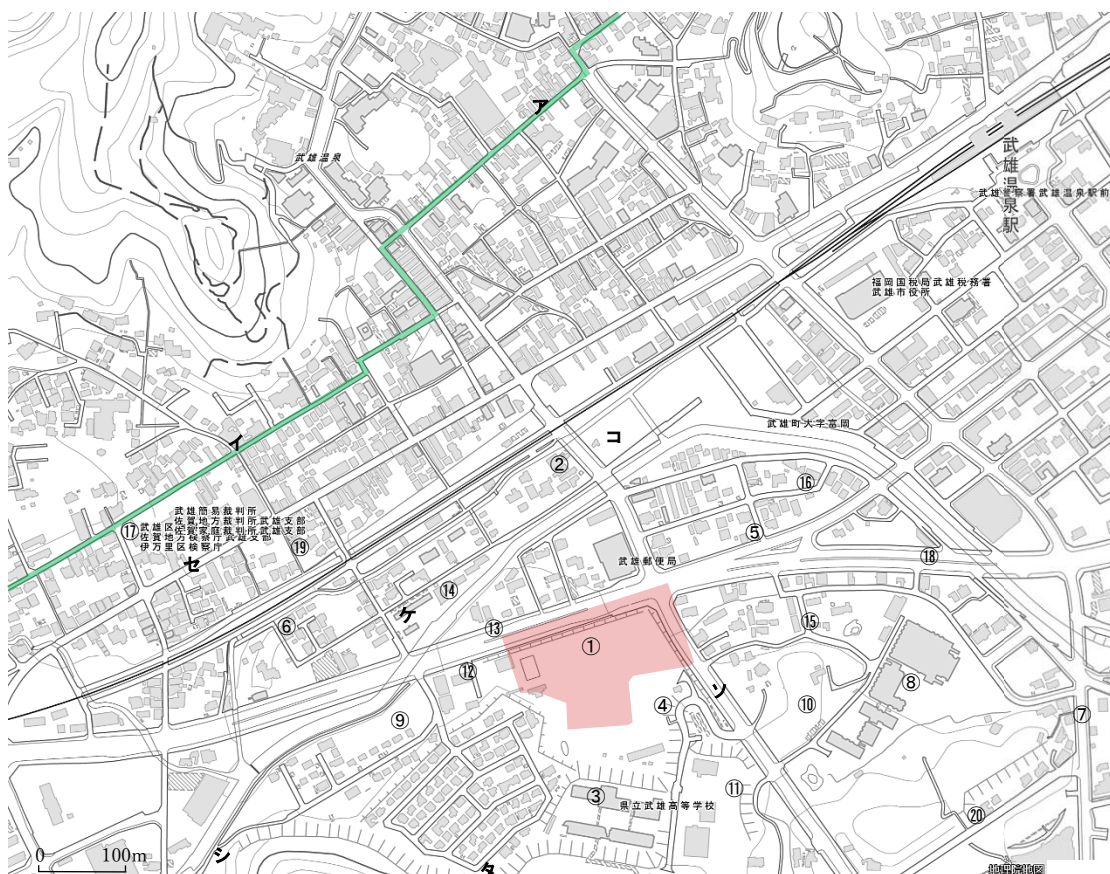


図3 現在の武雄

ベースマップは地理院地図。旧長崎街道のルートと陣屋跡の外郭を示した。図中の①～②⑩は図1・2と共通、ア・イ・ケ～シ・セ～タは本図のみ。

三ノ丸④を取り込んでいた。武家地は陣屋とともに黄色で示されている。陣屋と武家地は堀で区切られ、さらに武家地は堀の役割を果たす川によって複数の曲輪に分かれており、陣屋は合わせて三重の堀で守られている。武家地入り口のうち大手口といえる②、またそこから陣屋へと進むルートにある⑤は、ともに門こそ描かれていないものの土塁で枳形に区切られ、勢屯になっているようである。武家地の西側の入り口⑥も勢屯になっていることがわかる。陣屋と武家地は「郭内」とよべるようなまとまりをもち、堅牢な要塞になっていることがわかる。

この図で注目したいのは、朱の線と墨の書き込みで旧状も記録されていることである。⑦「…已前堀之由」、ウ「以前此堀…」とあってともに橋が描かれ、エには「…已前道之由」、またオにも「已前此所道…」と記され、また力には「…枳形^(門)□趾也」とある。この「已前(以前)」がいつのことかは判断できないものの、武家地、そして城下町の変容を知る貴重な手掛かりといえよう。

武家地東部(のちの別邸⑧、現在の文化会館の付近)には、「白石廓」という注記(キ)もあって特に注目される。この図1の時点ではここは水田になっているが、かつては「郭内」であり、武雄神社参道下の堀⑦で郭外と区切られていたと考えたい¹⁵⁾。かつてはより頑強な城構えであったこと、また、図1の時点までに「郭内」が縮小したことが推定できるのではないかな。

武家地の西部では、「古えんせう屋」(古煙硝屋)⑨に注目したい。火薬庫あるいは火薬製造所であろうが、「古」とあることに留意される。武雄においては、天保年間初期(1830年ごろ、1834(天保5)年か)に、砲術訓練の開始にともなって真手野(現武雄市武内町)に火薬製造所が新設されたことが知られている¹⁶⁾。しかし、この図1の成立は、上述したように記載内容、正確には記載された家臣の名前から18世紀後期ごろと推定されており、真手野の新火薬製造所とは時期が合わない¹⁷⁾。この図1の時点で、現在では知られていない火薬庫、火薬製造所があったのだろうか。

(3)「御屋敷並武雄社付近図」 図2「御屋敷並武雄社付近図」は上述したように1850～60年代のものと推定されている。1848年完成ともされる¹⁸⁾武雄領主の別邸⑧があること、一方で、1869年完成ともされる¹⁹⁾石門がないことなどから、それは首肯される。なお、陣屋は1868(慶応4)年の火災によって機能を別邸に譲った。

この図2をみて驚くのは、陣屋内の旧三ノ丸④や領主邸西側のようなところまで耕地化(大半は白色の「畠」、一部は黄色の「田」)していることである。一部は領主家の菜園のような位置づけではないかとも考えられるが、全部ではないにせよ、家臣や近隣農家によって耕作されているのではないだろうか。これは武雄鍋島家の経済的な困窮を反映しているとみることができようし、陣屋・武家地は要塞としての性格を失い、開放性を強めていたといえよう。武家地と別邸の間の尾根⑩がほとんど「畠」になっていることも、開放的という印象を強く与える。

陣屋内へは東から尾根を切り通し状に越える小道⑪も描かれており、同じ道は図1にもみえる。この尾根は現在では武雄高校の敷地になって削られているが、切り通しの痕跡が確認できる(図4)。

一方で、陣屋内の旧二ノ丸③は山林として描かれている。この二ノ丸は1835(天保6)年に銅製大砲を鑄造した反射炉が築造された場所であるとされている²⁰⁾。しかし、図には全くその痕跡も読み取れない。10数年以上が経過して反射炉の跡は全くなくなってしまったのか、あるいは、武雄の砲術に大きく関わった高島秋帆が1842年に投獄されたのちに反射炉は秘匿のため跡形なく壊されたとみるべきなのだろうか。

陣屋跡地は武雄高校のグラウンドに当たる。ただし、大きく盛り土され、さらには陣屋の敷地は4車線の国道で削られてしまい、一見すると陣屋の外郭さえ何の痕跡もないようである。しかし、北に突き出した尾根⑫(図1には「櫓台」とある)のために堀端の本小路が北に屈曲した部分⑬は現在でも歩道の幅の変化として残っている。

武雄領の^{ゆうこう}邑校は身教館といい、1717年に設立され西田小路の⑭の位置にあった。現在の九州電力社宅の位置(図3のケ)という説明をよくみるが、これは誤りである²¹⁾。また、武雄市図書館・歴史資料館はウェブサイトで公開している絵図のうち「武雄神社付近の図」について、図3のコの位置に「学校」とあるのを身教館として解釈しているが²²⁾、これは身教館が1869年に火災で焼失したのち、1870年に設けられた郷学校(のちの武雄小学校)²³⁾である。

陣屋のすぐ東側の武家地は図1から少し変化し、勢屯と思われる空地が減り、陣屋の東と北に1つずつあった門が北側の2か所になっている。また別邸へつながる穴小路⑮ができている。現在は、4車線の国道バイパスが貫通し、新設の街路と合わせて区画整理地区のような雰囲気であるが、図2と図3とを対応させると当時の小路のほとんどが残っていることがわかるし、現地には武家地当時の敷



図4 旧三ノ丸への切り通しの跡

右の稲荷社も図2と同じ位置にある。2022年撮影。

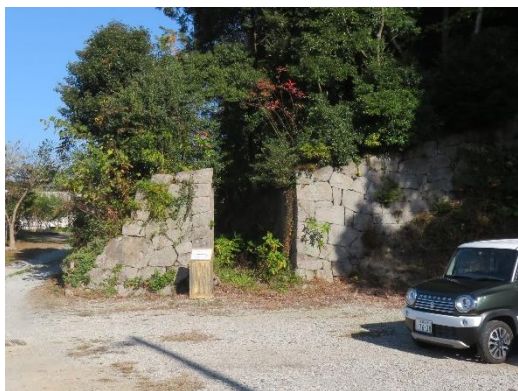


図5 石門

解説板は誤って戦国時代の遺構としている。2021年撮影。

地を維持した住宅もみられる。浦小路の東側⑩は川沿いに県道が開通（1888年）²⁴⁾したために消滅したが、かつての浦小路の痕跡は私道や敷地境から現在でも読み取れる。

陣屋跡西側の、図1に「古えんせう屋」とあった大きな区画⑨には、図2でも射撃場と思われる土塁で囲まれた細長い構築物が描かれている。ここは武雄高等学校、武雄高校西校舎をへて住宅地になった。この区画の西、図3のシには、上述したように、図2が描かれたのち石門がつくられ、現存している（図5）。

（4）下西山の武家地 図1と図2の大きな違いは、下西山方面、つまり陣屋の北西部で長崎街道との間、⑪付近の武家地を描くかどうかである。これらの武家地は、図2をみると西田小路西端の勢屯⑥の外、郭外といってもよい位置にある。しかし、少なくとも近世後期には「小路」、すなわち正規の武家地として位置づけられていた²⁵⁾。

図1の時点では、下西山の武家地はなかったか、正規の武家地「小路」としては位置づけられていなかったのではないかと。ただし、いずれにせよ、以下の2つの理由から、この武家地は図1に描かれた武家地よりも新しいと考えられる。

まず、図1と図2を比較すると、陣屋東部の武家地が縮小していると判断できる。図1では、東方の武雄神社参道下まで、黄色の「屋敷」、すなわち「郭内」として表示されている（⑩）。ただし「向い田」と記され、建物は少ない。その部分は、図2では黄色の「田」と（武家ではない）「人家」からなる郭外として示されている。この部分は低湿な氾濫原であり、もともとは「郭内」の武家地であったのが徐々に屋敷が減少していった（、そして台地上で高燥な北西部に武家屋敷が移っていった）過程が図1には表れているのではないだろうか。上述した図1中の朱線でかつての道が示されているのちの別邸付近⑧も、あるいは元は武家地だったのかもしれない。

2つめとして、北西部下西山の武家地は長崎街道に沿う牛ノ鼻町（新町）の町人町の外側（西・南側）を取り巻くように成立しており²⁶⁾、牛ノ鼻町（新町）よりも後に成立したと考えられる。牛ノ鼻町（新町）は町名からみて町人町の中心部、本町よりも後にできた町であり²⁷⁾、武家地はさらに新しいと考えられる。この武家地は長崎街道塚崎宿の長崎側を固める位置にある²⁸⁾。1717（享保2）年に長崎街道が塚崎宿経由に変更されたことがこの下西山の武家地が本格的に整備される契機となった

ことも考えられる。

図2をみても下西山の武家地の道は細く、下級武士の居住地区らしさが表れている²⁹⁾。また、図2の②付近では道沿いに細長く田がある（その外側も田だろう）が、これは道を狭めて水田にした痕跡なのではないだろうか。

下西山の武家地は、旧国道34号線③の貫通³⁰⁾などによって大きく変貌した。しかし、茅葺のクド造りの屋敷など旧武家地らしい景観が残り、かつての道幅のままの一角もある（⑩、図6）。また、住宅地が広がるなかに裁判所・検察庁や税務署といった公的機関が立地する点も旧武家地らしいといえる。



図6 旧武家地の狭い街路

かつての道幅を保つ一角。2021年撮影。

(5) 城下町プランの特徴 ここでは武雄の城下町プラン全体の特徴について、小括を兼ねて示したい。

i) 近世初期の町人町と武家地が離れた状態が幕末まで解消されなかったこと

武雄の町人町と武家地は幕末においても大手口といえる②付近ではつながっていない。これは木島が指摘するように³¹⁾、河港である近隣の高橋町（現、武雄市）が商業的に繁栄を続け、町人町（湯町、塚崎宿）の発達に限られていたことによる。このような町人町と武家地の空間的な乖離は、商業機能に弱い大名城下町でも珍しくはない。近隣の鹿島がそうであるし、他地域の事例としては苗木（岐阜県）、大多喜（千葉県）などをあげることができる。

なお、上述したように、武家地のおそらくは移転の結果、西部では町人町と武家地が接する状態になっていた。

ii) 近世初期に堅牢な陣屋・武家地が計画的に形成されたが、幕末までに開放化が進んだこと

佐賀藩武雄領では、塚崎城の城割後も、ある時期までは城を維持しようとしていたという見方もある³²⁾。それはともかくとしても、図1段階では陣屋の前面は堀・土塁と武家地、背後は険しい斜面で守られ、武家地は二重の堀とセットになっていることが読み取れる。さらに図1からは、元は東部の武雄神社参道下にも堀⑦があってそこまでが「郭内」であり、図1時点よりもさらに堅固であったとみられることを指摘した。

図2の段階では、それに加えて、東部⑩の「郭内」が縮小し、（おそらくはそこから移転して）北西部の郭外である下西山に武家地ができていく。拡張新規武家地が当初のプランから離れるのは他の城下町でも珍しくはない。武雄の場合、元々の武家地は氾濫原で水害を免れられないという弱点があった。これだけでも陣屋・武家地の開放化といってよいだろうが、図2からはさらに、陣屋内や武家地周囲の耕地化が進んでいることも読み取れる。陣屋・武家地は要塞性を喪失していったといえるだろう。

さらに、図2ののちまでこの陣屋・武家地の開放化は進行している。1868年に火災で陣屋が失われると、別邸⑧に陣屋の機能は移った。別邸は穴小路の裏門で武家地とつながっているが、表門は武

雄神社参道⑳に向いている。別邸と武家地は並列的な存在で、つまり、武家地を通らずに別邸に表門から入れるようになった。これは、陣屋の完全な開放化、要塞性の完全喪失であり、城下町プランの大きな変容であるといえる。武家地を一切介さずに陣屋に入れることは、地方支配役所陣屋のような小規模な陣屋では一般的といえよう。しかし、領主居館をとまなう小城下町では、江戸中後期の新設大名陣屋である鯖江（福井県）ぐらいしか例はないように思われる。

このように、武雄では近世初期につくられた堅固な陣屋・武家地の開放化が進み、さらには別邸が事実上の陣屋となることによって、要塞性を完全に失うに至った。ある 1 つの陣屋がこのようなプロセスをたどった点で、武雄陣屋は類例のない興味深い存在であると考えられる。

Ⅲ 現代における陣屋跡地の位置づけ

(1) 明治以降の陣屋跡地の変遷 ここまで、武雄小城下町の近世を通した変化を絵図から読み取ってきた。本章ではそれ以後の陣屋跡について検討する。以下ではまず、陣屋の遺構が大きく損なわれるのは昭和末期以降という近年のことであることを確認する。

上述したように、陣屋は 1868 年に火災で失われた。その後、1900 年測量 5 万分の 1 地形図では、陣屋跡は水田と空地（畑）として表記されている。

陣屋跡は 1927 年に鍋島家から売却され、1928 年 4 月に旧制武雄中学校（のちの武雄高校）が開校した。当時の写真や戦後すぐの米軍作成地図をみると³³⁾、塚崎城二ノ丸・三ノ丸の北端を含む陣屋跡を、上段が校舎、下段がグラウンドの 2 段に整地している。写真からは陣屋跡の堀だけでなく土塁も残ることが読み取れる。

戦後の 1962 年になって、塚崎城跡二ノ丸・三ノ丸・本丸の東部を破壊して、従来の校地を南に拡張し、武雄高校の新校舎が建設された³⁴⁾。塚崎城跡の遺構はこの時点で大きく失われたが、陣屋跡には大きな変化はない。1963 年には、陣屋跡北側の堀を埋め、陣屋西側の尾根（櫓台）⑫の先端を削って、本小路⑬が 2 車線 16 メートル幅に拡幅され、市道下西山小楠線（のち国道 34 号線）として開通した³⁵⁾。さらに、1975 年には、陣屋東側の堀が埋め立てられ、一部はかなり盛り土も行われて、県道武雄鹿島線の新道（現、武雄塩田線、図 3 ヌ）が開通した³⁶⁾。また、1970 年ごろには、武雄高校新校地の西側に残されていた本丸西部や上述の尾根⑫が削平され、それらの大半は武雄グリーンハイツという住宅地になった。なお、本丸西端の遺構はわずかに現存し³⁷⁾、住宅地内の公園（図 3 タ）に「塚崎城跡」とだけ刻まれた標柱が建っている。

このように、1960～70 年代に陣屋跡地の周囲は大きく姿を変え、陣屋の北・東にあった堀も埋められて道路になった。とはいえ、陣屋そのものの跡地は武雄高校グラウンドとして維持されていたことがわかる。

その後、陣屋跡が大きく変化したのは昭和の末から平成の始めにかけてであった。1986～1989 年に、陣屋の堀跡を通っていた県道武雄鹿島線（図 3 ヌ）がグラウンド（陣屋跡地）を削って西側に付け替えられた。その際、堀を埋め立てたそれまでの道路敷は住宅の敷地になり、堀端のラインさえわからないようになっていた。さらに 1991 年には、武雄高校グラウンドのかさ上げ工事が完成するとともに、グラウンド（陣屋跡地）北側を大きく削って国道 34 号線を 4 車線 30 メートル幅に拡幅する用地が確保された（4 車線化は 2000 年³⁸⁾）。

このような工事によって、昭和の末まで武雄高校グラウンドとして残っていた陣屋跡は、外郭が大きく削り取られるばかりか残存部分にも盛り土が行われ、全く形跡を留めなくなってしまった（図 7）。陣屋跡地はまるで山腹の造成地のようで、4 車線の国道と相まって郊外のような景観を呈している。

（2）陣屋が注目されない現状 全くその姿を失った武雄陣屋跡には、最初にも述べたように、石碑や解説版は一切ない。別邸⑧の「鍋島藩武雄領主の庭園」解説板で言及されるのみである。

観光や郷土史の文脈でも陣屋の存在は無視に近い。『武雄市史』にはむしろ詳細な記述があるもの

の、それ以外では武雄市内で刊行された市民向けの郷土史に関する書籍でも極めて少ないことを表 1 に示した。ともに決して薄い本ではなく、きちんと地域の歴史を語ろうとしているが、陣屋や武家地のことはほとんど記述されていない。遺構が消滅したから語られないというよりは、陣屋跡が武雄高校グラウンドとして残っていたころからあまり注目されていないといえる。

陣屋関連の遺構には、1869 年建設ともされる石門（図 3 シ、図 5）もある。現地には解説板があり、観光パンフレットの地図に記載されている例もある。ただし、いずれも「塚崎城石門」と表記され、解説板は戦国期の城門であると誤認した内容になっている。

後述するように、別邸跡は目立つものではないが顕彰の対象となっている。それ以外に陣屋や武家地を現地で説明するものをあえて探せば、別邸北側の「塚崎の大楠」の解説板（2017 年）に図 1 の



図 7 陣屋跡

旧本小路（現国道 34 号線）沿いに西を望む。左前方が大きく盛り土された陣屋跡の武雄高校グラウンドで、左手前付近が陣屋を囲む堀の北東角にあたる。2021 年撮影。

表 1 武雄の郷土史における陣屋・武家地に関する記述

内容	武雄歴史研究会編『ふるさとの歴史散歩 武雄』 武雄市文化会議，1982	武雄歴史研究会編『新・ふるさとの歴史散歩 武雄』武雄市文化会議，2007
陣屋	「塚崎城跡の図」（89 頁，注：「武雄城下屋敷図」 ＝図 1） 「塚崎城の跡に館をつくり」（91 頁），「塚崎城の 跡に館を新築して」（104 頁） 「城内（武雄高校）に登り窯を構築し…」（111 頁），「武雄城三の丸跡の山中に三の丸窯」（136 頁） 「本邸（武雄高校）と新御茶屋…の間に電信線」 （112 頁）	
武家地	身教館「九州電力会社の社宅の位置」（147 頁， 注：誤り） 「旧女学校の位置は維新前の練兵場」（152 頁）	女学校「武雄領の練兵場」（38 頁） 「武家屋敷は御船山北麓の小路にあり，城下町を 形成していました」（51 頁，注：陣屋の説明なし）
別邸	「本邸…と新御茶屋（文化会館南側御菓草園）の 間に電信線」（112 頁）	文化会館「旧武雄領主鍋島氏の屋敷」（68 頁）， 大砲発掘「武雄鍋島家邸内」（69 頁） 「武雄領主の別邸に旋盤工場」（142 頁）

塚崎城に関する記述は示していない。

絵図の一部分が示されているだけである。塚崎城本丸のわずかな跡地には上述したように標柱があるが、何の説明もなく、そもそもこれは塚崎城跡を示すもので武雄陣屋と直接関わるものではない。

このように、武雄陣屋については、現地や出版メディアにおける表象に限られることが1つの特徴として指摘できる。『佐賀県の中近世城館』では、「所謂「一国一城」体制下での有力外様大名の藩領内における諸要塞については、文書史料上の種別名称（陣屋、屋敷、御茶屋）にとらわれて実像検証が未だに進んでいない」と指摘されている³⁹⁾。この指摘は研究面だけでなく、歴史・文化遺産としての顕彰についても当てはまるだろう。城ではないことに加えて大名でもない、武雄のような家臣居所陣屋は、歴史を語る文脈に乗りにくいことが容易に予想され⁴⁰⁾、陣屋の表象に限られる大きな要因になっていると考えられる。

武雄において陣屋の表象がごく限られることには、このほかに2つの理由が考えられる。1つは陣屋建物が火災で失われるなど、早い時点で視覚に訴求する景観を失ったことである。上述したように、近年になって遺構すらほぼ完全に失われるに至った。武雄以外の佐賀藩領の家臣居所陣屋のうちでも、記念碑・解説板の類が現地に全くないのは、遺構も完全に失われた川久保陣屋（川久保館、川久保神代家、佐賀市）のみである⁴¹⁾。なお、武雄陣屋に関わる遺構としては例外的に、武雄陣屋西端の土墨土留め石垣が保存されている。ただし、別邸入り口横、武雄神社参道²⁰への移築復元であり（2000年）、陣屋跡とは切り離されてしまっている。

もう1つの要因として指摘できるのは別邸の存在である。上述したように、別邸は1848年に設けられたとされており、1868年以降は武雄鍋島家の本邸となっていた。第二次世界大戦後に敷地は武雄市の所有となり、大半の建物は取り壊され、武雄市文化会館が跡地に建設された（1975年、一部は1973年）。現在は土蔵や庭園、武雄神社側からの榊形状の入り口などが残っている。

別邸跡には、蘭学を導入し別邸を設けた幕末の武雄領主、鍋島茂義の銅像・顕彰碑（1992年）がある。また上述した「鍋島藩武雄領主の庭園」解説板では、武雄陣屋について現地で唯一言及している。別邸跡はこうした庭園などの遺構、文化会館という土地利用や領主銅像など、全国各地の城跡（陣屋跡）に共通する雰囲気을漂わせているといつてよい（図8）。すなわち、陣屋に代わって別邸跡が、武雄の近世、武雄鍋島家を象徴する場所としての地位を獲得しているとみなせるだろう。上述したよう



図8 別邸跡

南西を望む。右の建物が武雄市文化会館。2022年撮影。

に、陣屋土墨石垣が別邸入り口横に移築復元されたことは、別邸のそうした求心力の結果と解釈できる。ただし、別邸跡も格段の注目を受けているわけではなく、観光パンフレットには管見の限り取り上げられていない⁴²⁾。

このように、武雄において陣屋の表象はごく限られている。ただし、武雄においては温泉が観光や地域の歴史における中心とはいえ、陣屋は決して些細な存在ではなかった。

武雄では、鍋島茂義による幕末の蘭学の興隆、砲術をはじめとしたさまざまな技術導入が強調される。上述したように、長崎から高島秋帆を招

き砲術の指南を受けるとともに、反射炉を設けて銅製の大砲を鑄造した（1835 年）。その反射炉が設けられたのは、上述したように陣屋内の旧塚崎城二ノ丸とされている。

武雄陣屋跡はこのように、武雄の歴史にとって、あるいは日本^{ナショナルヒストリー}史上も産業革命の前走として、別邸跡とともに大きな役割を果たした場所であるとみることができる。しかし、陣屋内に反射炉が置かれたことの史的な裏付けはなく、かつ陣屋跡は開発のため痕跡も残らず、また一般人は立ち入れない。

結果として、武雄の蘭学、武雄の近代砲術は「記憶の場」をもたず、いわば根無し草になってしまっているといえるのではないか。現地で、あるいは現場に結び付けて、こうした歴史を知ることにも感じることもできなくなっている⁴³⁾。歴史を活かしたまちづくりとして全く成功していないといわざるをえない。

IV おわりに

本稿では、家臣居所陣屋を中心とした小城下町の一事例として佐賀県武雄を取り上げ、主として景観復元的な検討を行った。

まず、「武雄城下屋敷図」（図 1）、「御屋敷並武雄社付近図」（図 2）を詳細に読むことで、(a) 近世初期の町人町と武家地が離れた状態が幕末まで解消されなかったことを確認し、(b) 近世初期に計画的に形成された堅牢な陣屋・武家地の開放化が幕末までに進んだことを明らかにした。b は陣屋の別邸移転（1868 年）でさらに進行したと考えられる。また、絵図に描かれた近世の景観が現在の景観にどう読み取れるか確認した。

さらに、特論的に陣屋の明治以降の変容に着目し、陣屋跡が形跡を留めなくなるのは昭和末期から平成初めという近年のことであることを確認した。その上で、(c) 現地や出版メディアにおける陣屋の表象はごく限られていることを示し、その要因として陣屋焼失による景観の消滅、また別邸による陣屋の地位の代理を提示した。

a～c はいずれも、家臣居所陣屋所在地を含む小城下町に、頻度や程度の差こそあれ、共通してみられる特徴といってよい。一方で b・c は、武雄においては別邸の存在によってより強められているといえる。そこに武雄陣屋・武雄小城下町の特異性、興味深さが表れていると示しておきたい。

【付記】絵図の利用にあたっては、武雄市図書館・歴史資料館にお世話になった。記して感謝申し上げる。

注

- 1) 馬部隆弘ほか「大阪陣屋サミット：陣屋の魅力と歴史的価値」大阪大谷大学歴史文化研究 19, 2019, 128 頁。
- 2) 中島義一「陣屋」（藤岡謙二郎・山崎謹哉・足利健亮編『日本歴史地理用語辞典』柏書房, 1981）300-301 頁。陣屋を①幕府の郡代・代官などの地方支配の役所, ②大名で家格上、国主・城主・城主格でない者の居所, ③高禄旗本の居所, ④大藩の重臣の居所, ⑤藩の飛地領における地方支配の役所など, と分類している。
- 3) 小高春雄「房総の陣屋」研究紀要（千葉県教育振興財団）28, 2013, 1-8 頁。大名陣屋, 旗本陣屋, 出張陣屋, 代官陣屋, 海防陣屋と分類している。
- 4) 歴史地理学で重視されてきた。渡邊秀一「小城下町研究の問題点と可能性」立命館地理学 9, 1997, 55-66

- 頁など。
- 5) 木村哲男・松原宏昌「近世陣屋を調査する：城郭発展史の縮図を示す陣屋虎口空間」（新創社編『城郭研究 最前線 ここまで見えた城の実像』新人物往来社、1996）170 頁。
 - 6) 土平 博「近世陣屋の立地展開とその形態の地域的相違」2018 年人文地理学会大会研究発表要旨、2018、118-119 頁。
 - 7) 前掲 1)。
 - 8) ①木島孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』九州大学出版会、2001、255-256 頁。②佐賀県教育委員会（宮武正登ほか）「武雄城跡」（佐賀県教育委員会『（佐賀県文化財調査報告書第 204 集佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅲ）佐賀県の中近世城館第 3 集各説編 2（小城・杵島・藤津地区）』佐賀県教育委員会、2014）242-249 頁。
 - 9) 武雄 淳「武雄街図復元：街の歴史の変遷を探る」湯か里 62、2009、2-19 頁。
 - 10) 「文化遺産オンライン 武雄城下屋敷図」<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/206701>（2022 年 1 月 31 日検索）。
 - 11) 佐賀県教育委員会『（佐賀県文化財調査報告書第 204 集佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅲ）佐賀県の中近世城館第 3 集各説編 2（小城・杵島・藤津地区）』佐賀県教育委員会、2014）376 頁。
 - 12) 木島は「慶長期の武雄城下は、街道に沿って形成された市町が空間的に城郭と分離した、戦国色が濃厚な集落景観を形成していたと推定される」とする。前掲 8) ①257 頁。
 - 13) 「数値地図 25000（土地条件）」、「地理院地図」<https://maps.gsi.go.jp/>（2022 年 1 月 31 日検索）。
 - 14) 石井は「禁戸」と表現している。石井良一『武雄史』石井義彦、1956、148 頁。
 - 15) ⑧の南北の尾根上に曲輪群など山城の遺構があることが指摘されているが、⑧がかつては「郭内」であったとみるならそれは自然である。佐賀県教育委員会（宮武正登ほか）「武雄鍋島氏別邸跡」（佐賀県教育委員会『（佐賀県文化財調査報告書第 204 集佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅲ）佐賀県の中近世城館第 3 集各説編 2（小城・杵島・藤津地区）』佐賀県教育委員会、2014）242-249 頁。
 - 16) ①武雄歴史研究会編『ふるさとの歴史散歩 武雄』武雄市文化会議、1982、112 頁。②武雄歴史研究会編『新・ふるさとの歴史散歩 武雄』武雄市文化会議、2007、142 頁。
 - 17) のちに「古えんせう屋」と書き込まれた可能性も考えられる。
 - 18) 前掲 14) 529 頁。
 - 19) 前掲 14) 541 頁。
 - 20) 武雄市史編纂委員会編『武雄市史 上巻』武雄市、1972、705 頁。
 - 21) 前掲 20) 666 頁など。この間違いは 1918 年に開通した女学校通りを、図 1・図 2 にある西田小路と本小路をつなぐ小路と誤認したことによる。なお同じ『武雄市史 上巻』の別の部分（492 頁）では身教館跡地を「電電公社社宅」としているが、身教館跡地が 1972 年当時電電公社社宅であったかどうかは確認できなかった。
 - 22) この図には 1874 年開通の県道（のちの武雄鹿島線）も書き足されている。「武雄鍋島家資料（絵図）閲覧システム」<http://takeo-od.sakura.ne.jp/maps/collections>（2022 年 1 月 31 日検索）。
 - 23) 前掲 14) 264 頁。
 - 24) 前掲 16) ①145 頁。なおこの県道（武雄鹿島線）には、1905～1931 年の間、馬車軌道、ついで蒸気軌道も通っていた。前掲 9)。
 - 25) 前掲 20) 492-496 頁など。なお、「天保の末年侍の町住は風儀を損する虞ありと退出を命ぜられた」という。前掲 14) 147 頁。
 - 26) 図 2 では武家地は長崎街道の南側までしかなく描かれているが、『武雄市史』所収の「三十三大區二小區杵島郡武雄（ママ）村下西山村貫属家舗地圖」（1874 年）では西山小路（長崎街道）の北にも武家地がある。前掲 20) 付図 1。
 - 27) 木島は、慶長期以前の町は広福寺境内の内町のみで、「恐らく、本町・十間堀町・牛ノ鼻町の成立は、長崎街道が塚崎（武雄）ルートに変更された享保年間（1716～1736）以後ではないかと思われる」と述べる。前掲 8) ①。ただし、本町などの成立がこれほど遅い根拠はなく、木島は、長崎街道から武雄温泉への分岐点、札ノ辻にかつて広福寺山門があり、2 反歩の竹林であったという『武雄市史』の記述から、「以前の町・十間堀町一帯は竹林であったこととなる」としているだけである。武雄市史編纂委員会編『武雄市史 下巻』武雄市、1973、237 頁、前掲 8) ①。とはいえ、わずか 2 反（約 2000 m²）では本町、十間堀町がなかったという証拠にはならず、本町、十間堀町、あるいはそれらの前身といえる地区があったとみるのが自然ではないか。牛ノ鼻町（新町）は、地名からそれよりも新しく、江戸初期以降に徐々に成立したと考えたい。牛ノ鼻町（新町）の西福寺と常念寺は 1599（慶長 4）年に移転してきたもので、その時点で町建てがなされたとみることもできるが、新町という名称を重視すべきであろう。
 - 28) 武家地とともに西福寺も塚崎宿長崎側入り口（北側）にあるが、この寺は上述の通り、1599 年に他の 11 か寺とともに住吉城下から武雄城下に移されたものである。少なくとも長崎街道とこの寺の立地に関連があった

- とはいえない。前掲 14) 464 頁。
- 29) 佐賀県立博物館や武雄市図書館・歴史資料館所蔵の武雄領全体を描く各種の絵図では、この下西山から西田小路にかけての道が図 2 とは異なっている。例えば「武雄領御絵図」, 前掲 22)。ただしこれらの絵図は細かな街路を示すことを目的としておらず、また武家地の部分はかなり簡略化された表現になっているので、この部分は誤りとみなすべきだろう。
- 30) 前掲 16) ①144 頁。
- 31) 前掲 8) ①257 頁。
- 32) 『佐賀県の中近世城館』は「有事の際には回復が可能な旧山城の曲輪群を、背後に保ったままの状態で幕藩社会を経過していた」としている。前掲 11) 378 頁。
- 33) 「佐賀県立旧制武雄中学校校歌」https://www.youtube.com/watch?v=Xgmmk5S2f5Q&ab_channel=_buriyokai (2022 年 1 月 31 日検索)。「佐賀県立図書館データベース 米国陸軍撮影空中写真による地形図データベース」<https://www.sagalibdb.jp/tikei/> (2022 年 1 月 31 日検索)。
- 34) 「佐賀県立武雄高等学校 沿革」https://bukou.tokyo/wp-content/uploads/2020/06/bukou_enkaku.pdf (2022 年 1 月 31 日検索)。
- 35) 武雄市史編纂委員会編『武雄市史 中巻』武雄市, 1973, 565 頁。
- 36) 空中写真の判読による。
- 37) 前掲 8) ②244 頁。
- 38) 「国道 34 号 武雄バイパス」http://www.qsr.mlit.go.jp/site_files/file/s_top/jigyo-hyoka/171222/shiryout2_34_takeobaipas.pdf (2022 年 1 月 31 日検索)。
- 39) 佐賀県教育委員会 (宮武正登ほか)「小城陣屋跡」(佐賀県教育委員会『佐賀県文化財調査報告書第 204 集 佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅲ 佐賀県の中近世城館第 3 集各説編 2 (小城・杵島・藤津地区)』佐賀県教育委員会, 2014) 105 頁。
- 40) 佐賀藩における武雄など地方支配領主の「邑主」という正式名称も非常に小規模な領主をイメージさせる。また、武雄市内の円応寺にある武雄領主家の墓所も規模は決して小さくないが、現地には案内板も解説板もなく無視されている。
- 41) ほかに多久陣屋 (多久御館, 多久氏, 多久市) では陣屋跡から少し離れた地点に「御屋形広場」を整備している。また、久保田陣屋 (村田屋敷, 村田氏, 佐賀市) では初期の館跡ではなく、規模が縮小した後期の館跡に解説板などが建っている。
- 42) 観光の文脈では、現在は御船山楽園として知られる、1845 年設置の萩ノ尾の領主別荘 (茶屋) の方が注目される存在である。この別荘は「旧武雄邑主鍋島氏別邸庭園 (御船山楽園)」として、登録記念物 (名勝地関係) (2010 年), 佐賀県名勝 (2019 年) になっている。また、明治 150 年記念の新しい鍋島茂義銅像は、陣屋・武家地の外側、国道バイパス沿いに設けられた。
- 43) これは空間スケールの問題でもある。「どこ」かを問わず武雄を誇ることは過去語りとして可能であるが、観光やまちづくり、歴史地理学的景観復原の発想では武雄の「どこ」かという情報がどうしても必要になる。